

数学教育推進にかかわる実態調査

— 数学授業の改善のために —

◆ 調査の目的

中学校における数学教育推進上の諸課題等や、数学科教員の意識等について調査を行い、今後の数学授業の改善に役立てる。

◆ 調査項目作成の方針

過去の調査結果を参考に、主に授業力向上に関わる調査項目を作成し、都内公立中学校の実態を把握する。

◆ 調査対象

都内公立中学校（義務教育学校含）610校の数学科教員（教科主任等）

◆ 調査期間

令和5年7月21日（金）～令和5年9月1日（金）

◆ 設問数

設問数は毎年9問程度としている。

1 調査の概要

ア 調査の方法について

都内公立中学校（義務教育学校を含む。）全610校の数学科の教科主任に送付し、メールの返信によるアンケート調査を実施した。回答校数は604校、回答率は約99.0%となった。

イ 調査内容について

設問項目は、平成26年度の調査から経年比較をするものについては項目を変えず、例年一部を変えるに留めてきた。資料にあるグラフは、令和元年度から令和5年度の5年間で示している。学習指導要領に関する設問では、指導に関して2問、評価に関して2問設定した。

また、GIGAスクール構想の推進を踏まえて、ICTの活用に関して2問設定した。昨年度より、「数と式」「図形」「関数」「データの活用」の4領域ごとに、「2014 学びのイノベーション事業実証研究報告書（文部科学省）」に示された分類（下記のA1～C4）を用いて、活用状況を調査している。

A1 教師による教材の提示 B1 個に応じた学習(例:教室でのドリル演習) B2 調査活動(例:インターネット等で調べ学習) B3 思考を深める学習(試行錯誤する課題など)
B4 表現・制作(例:レポートやプレゼン作成) B5 家庭学習(例:家庭でのドリル演習、反転学習) C1 発表や話し合い C2 協働での意見整理 C3 協働制作 C4 学校の壁を越えた学習

ウ 分析と考察について

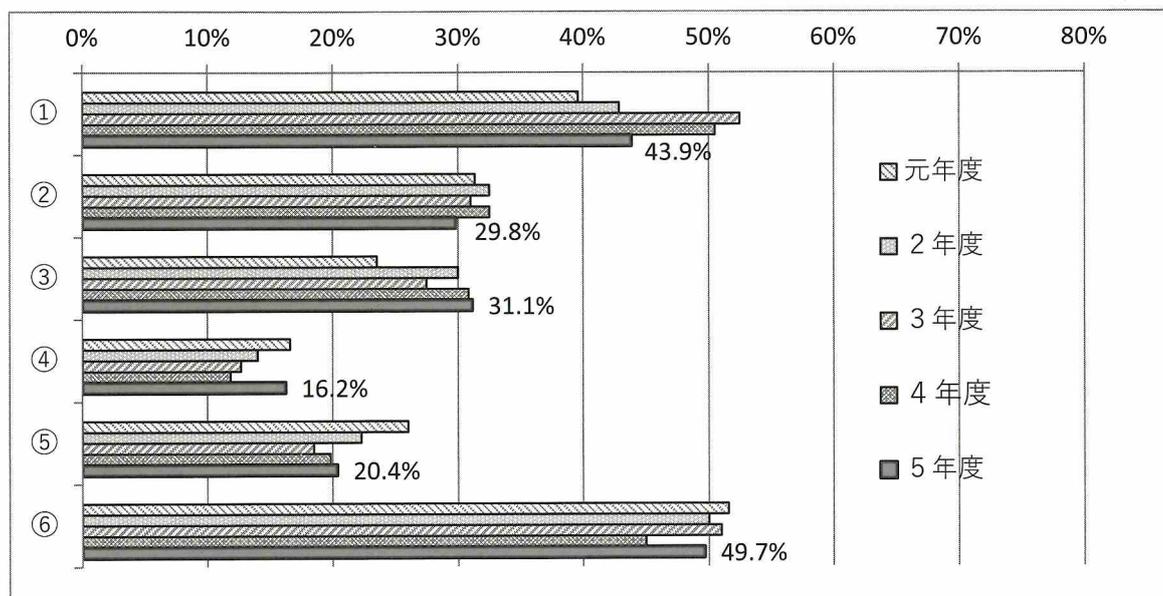
調査結果をもとに、特徴や傾向を明らかにした。見解については、調査部としての見解を主としている。

2 調査結果の分析・考察

設問1 昨年度の自校の数学科の課題として、どのようなものがありますか。次の中から2つまで選んでください。

- ① ICT機器を活用した授業
- ② 数学的活動を取り入れた授業
- ③ 言語活動を充実させた授業
- ④ 習熟の程度に応じた指導
- ⑤ 基礎・基本を徹底させる指導
- ⑥ 数学的な見方・考え方を働かせる指導

設問1	①	②	③	④	⑤	⑥
回答校(数)	265	180	188	98	123	300
回答割合(%)	43.9%	29.8%	31.1%	16.2%	20.4%	49.7%



【分析・考察】

「昨年度の自校の数学科の課題」における設問では、昨年と同様の傾向で、今年度も「①のICTを活用した授業」と「⑥の数学的な見方・考え方を働かせる指導」を課題として挙げた学校が多い。

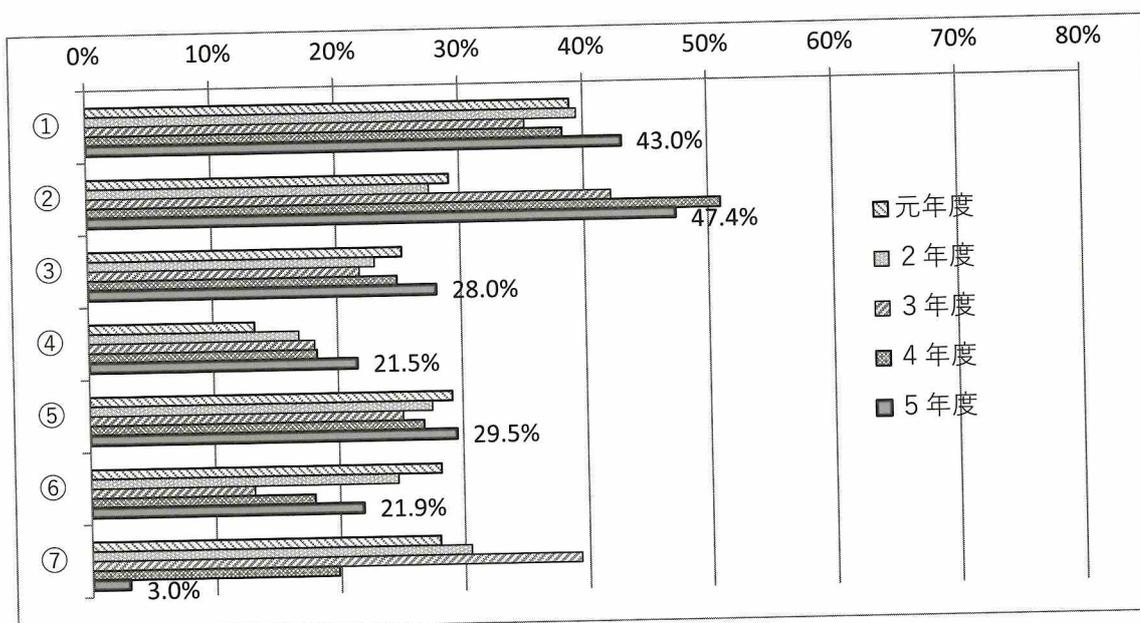
しかし、「ICT機器を活用した授業」への課題は、①～⑥の6選択肢の中で2番目の43.9%であるが、令和3年度ピークに過去2年で少しずつ減少している。GIGAスクール構想の推進により、全生徒にタブレットが配布され、活用について、教員の課題意識が高まり、その活用や指導の機会の増加で課題が少しずつ減ってきていることが推察される。

「⑥数学的な見方・考え方を働かせる指導」は、3年ぶりにトップとなり49.7%と約半数の近くの学校が課題と捉えている。本質的な数学指導に関して、課題意識を教員がもっていると推察できる。

設問2 授業力を高めるため、研修をしたい点は何ですか。次の中から2つまで選んでください。

- ① 数学的な見方・考え方を引き出す発問
- ② 興味・関心を高めるICTの活用
- ③ 一斉指導における個への対応や特別な支援を必要とする生徒への対応
- ④ 説明や論証など数学的な記述力を高める指導
- ⑤ 多様な考えを引き出す教材の工夫
- ⑥ グループ学習を活用した指導方法
- ⑦ 学習指導要領に沿った授業づくり

設問2	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
回答校(数)	260	286	169	130	178	132	18
回答割合(%)	43.0%	47.4%	28.0%	21.5%	29.5%	21.9%	3.0%



【分析・考察】

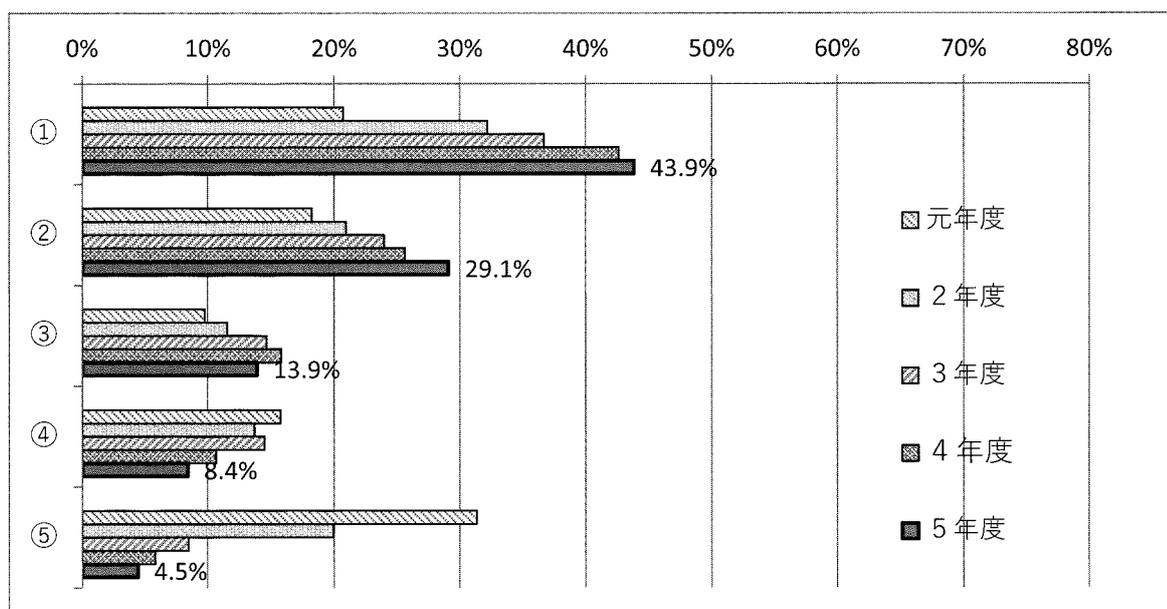
「授業力を高める研修」における設問では、指導法などに関する「①数学的な見方・考え方を引き出す発問」「③一斉指導における個への対応や特別な支援を必要とする生徒への対応」「④説明や論証など数学的な記述力を高める指導」「⑤多様な考えを引き出す教材の工夫」「⑥グループ学習を活用した指導方法」は昨年度よりすべて増えている。「②興味・関心を高めるICTの活用」は令和3年度から2年連続で大幅に上昇していたが、教員の意識も高まり、タブレットの活用も少しずつ進み、3.6ポイント減ってきている。

一方で「⑦新しい学習指導要領に沿った授業づくり」への研修が3.0%と激減している。令和3年度の39.3%をピークに、ほぼ0%に近づいた。現行の学習指導要領の完全実施3年目となり、実践を通して理解が深まり不安や課題がなくなってきた結果と推察できる。

設問3-1 数学の授業で教師がICTを活用する頻度は平均するとどの程度ですか。①～⑤の中から1つ選択してください。

- ①毎時間
- ②教科書の各項に1回程度（約2～3時間ごと）
- ③教科書の各節に1回程度
- ④教科書の各章ごとに1回程度
- ⑤ほとんど行っていない

設問3	①	②	③	④	⑤
回答校（数）	265	176	84	51	27
回答割合（％）	43.9%	29.1%	13.9%	8.4%	4.5%



【分析・考察】

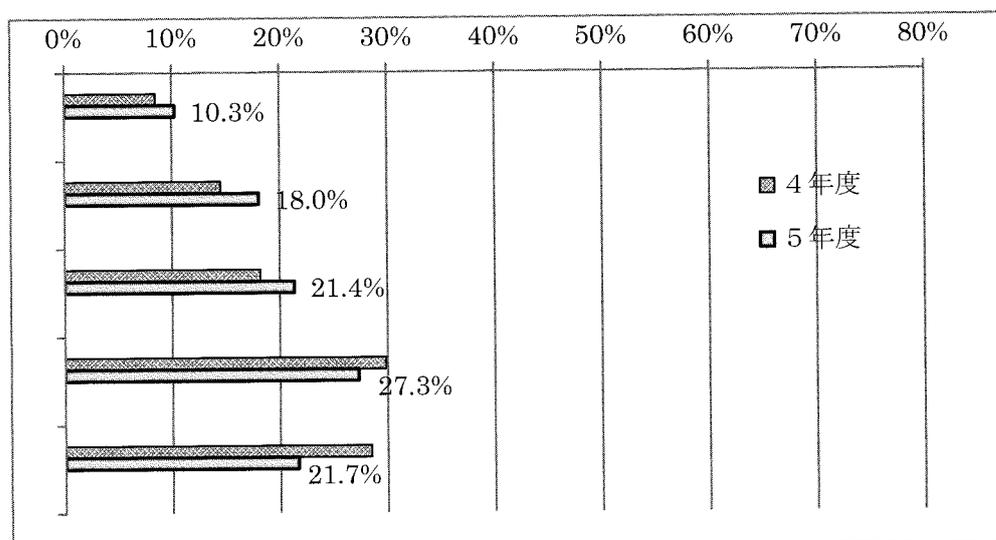
「数学の授業で教員がICTを活用する頻度」では、「①毎時間」が、令和5年度のグラフに見られるとおり、1.2ポイント増加し43.9%に伸びた。教員の毎時間の活用については、令和元年度から連続5年間増加している。

「①毎時間」の活用に加え、「②教科書の各項に1回程度（約2～3時間ごと）」と「③教科書の各節に1回程度」の割合を含めると、教員の活用は86.9%と高い実態である。また、「⑤ほとんど行っていない」の回答は4.5%と低い実態である。多くの教員がICTを何らかの形で授業に活用している実態が顕著になった。今後は、さらにICTを教員が学習に必要な場面で、効果的に活用していける技量や知識の幅を広げていく必要があると推察できる。

設問3-2 数学の授業で生徒がICTを活用する頻度は平均するとどの程度ですか。①～⑤の中から1つ選択してください。

- ①毎時間
- ②教科書の各項に1回程度（約2～3時間ごと）
- ③教科書の各節に1回程度
- ④教科書の各章ごとに1回程度
- ⑤ほとんど行っていない

設問3	①	②	③	④	⑤
回答校（数）	62	109	129	165	131
回答割合（%）	10.3%	18.0%	21.4%	27.3%	21.7%



【分析・考察】

GIGAスクール構想のもと、全校に生徒一人一台のタブレット端末が配布されて実質3年目であり、「生徒のICT活用の頻度」における設問を令和4年度に新たに加えた。

本設問では、「①毎時間」の活用は10.3%に留まり、1.5ポイント増加したが1割程度と低い値である。また、「②教科書の各項に1回程度（約2～3時間ごと）」の活用は3.5ポイント増の18.0%、「③教科書の各節に1回程度」の活用は3.2ポイント増の21.4%で増加している。「⑤ほとんど行っていない」は6.8ポイント減少し21.7%であった。

教員のICTを活用した授業は、常態化に向かって進んでいるが、生徒のICTを活用した授業は昨年度と比較して増加傾向にはあるが、十分ではない状況であることが推察できる。

今後、生徒のICTの活用の推進については、デジタル教科書の活用や共有画面の活用など領域や内容に関係なく、日常的に活用させる工夫も必要となってくる。また、ICTを活用することで、個々の特性等にあった多様な学習方法についても同時に研究を進めていく必要があると考えられる。

設問4 各領域において、ICTをどのように活用していますか。A「数と式」領域、B「図形」領域、C「関数」領域、D「データの活用」領域のA1～C4の項目ごとに、①～⑤の活用頻度を1つ選択してください。また使用アプリ等を記述欄に記入ください。

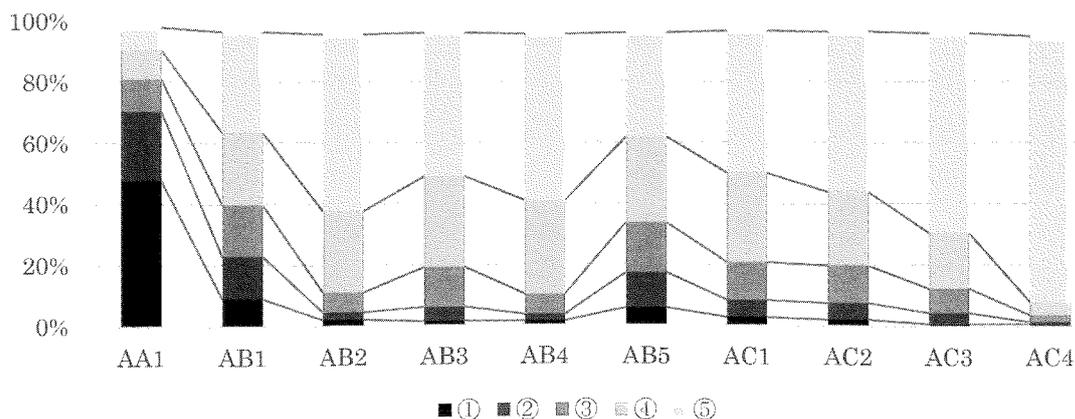
- ①毎時間
- ②教科書の各項に1回程度（約2～3時間ごと）
- ③教科書の各節に1回程度
- ④教科書の各章ごとに1回程度
- ⑤ほとんど行っていない。

A「数と式」領域、B「図形」領域、C「関数」領域、D「データの活用」領域での活用

分類	活用頻度	使用アプリ等の記述
A1 教師による教材の提示		
B1 個に応じた学習(例:教室でのドリル演習)		
B2 調査活動(例:インターネット等で調べ学習)		
B3 思考を深める学習(試行錯誤する課題など)		
B4 (個人での)表現・制作(例:レポートやプレゼン作成)		
B5 家庭学習(例:家庭でのドリル演習、反転学習)		
C1 発表や話し合い		
C2 協働での意見整理		
C3 (グループ等での)協働制作		
C4 学校の壁を越えた学習		

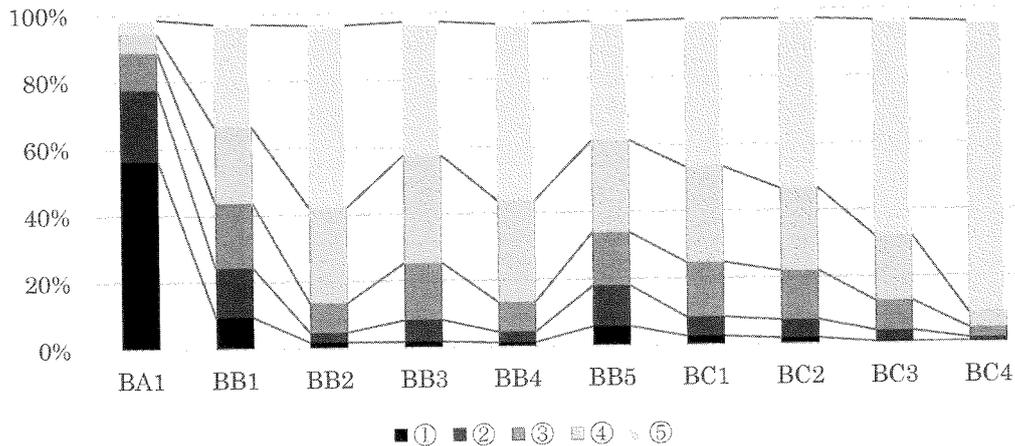
A「数と式」(回答割合%)

分類	①	②	③	④	⑤
A1 教師による教材の提示	48%	23%	11%	10%	7%
B1 個に応じた学習(例:教室でのドリル演習)	9%	14%	17%	24%	33%
B2 調査活動(例:インターネット等で調べ学習)	2%	2%	6%	27%	58%
B3 思考を深める学習(試行錯誤する課題など)	1%	5%	13%	30%	47%
B4 (個人での)表現・制作(例:レポートやプレゼン作成)	1%	2%	7%	31%	55%
B5 家庭学習(例:家庭でのドリル演習、反転学習)	6%	12%	16%	28%	34%
C1 発表や話し合い	3%	6%	12%	29%	47%
C2 協働での意見整理	2%	5%	12%	24%	52%
C3 (グループ等での)協働制作	1%	4%	8%	18%	65%
C4 学校の壁を越えた学習	1%	1%	2%	4%	87%



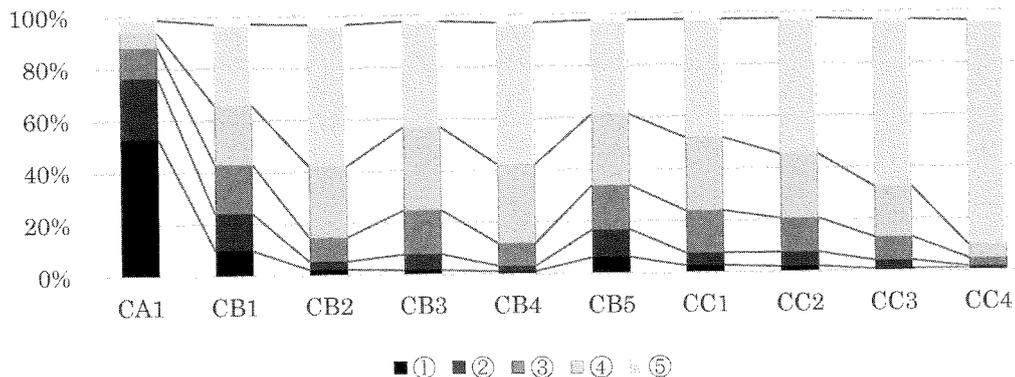
B 「図形」(回答割合%)

分類	①	②	③	④	⑤
A1 教師による教材の提示	56%	21%	11%	6%	4%
B1 個に応じた学習(例:教室でのドリル演習)	9%	15%	19%	23%	31%
B2 調査活動(例:インターネット等で調べ学習)	2%	3%	9%	28%	54%
B3 思考を深める学習(試行錯誤する課題など)	2%	6%	17%	32%	40%
B4 (個人での)表現・制作(例:レポートやプレゼン作成)	1%	3%	9%	30%	53%
B5 家庭学習(例:家庭でのドリル演習、反転学習)	6%	12%	16%	27%	36%
C1 発表や話し合い	3%	6%	16%	28%	44%
C2 協働での意見整理	2%	5%	15%	25%	51%
C3 (グループ等での)協働制作	0%	3%	9%	19%	64%
C4 学校の壁を越えた学習	0%	1%	3%	4%	87%



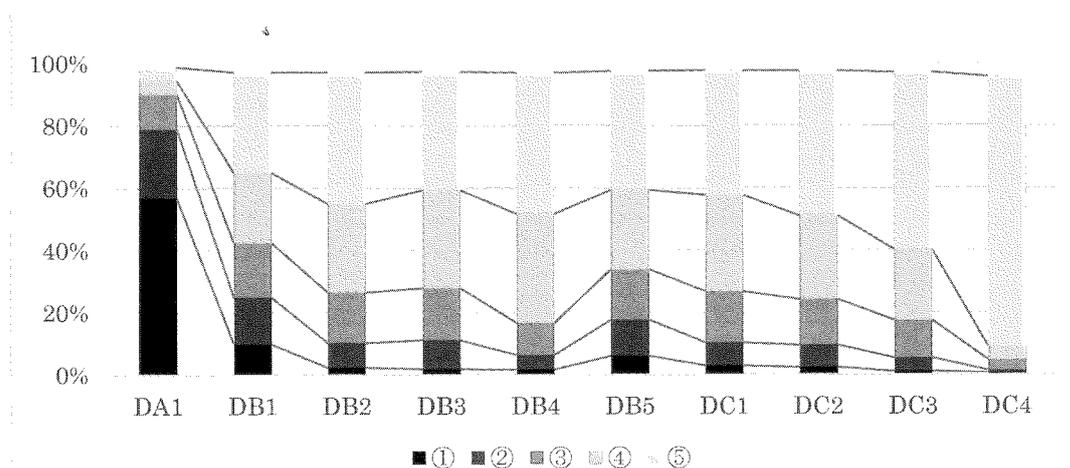
C 「関数」(回答割合%)

分類	①	②	③	④	⑤
A1 教師による教材の提示	53%	24%	12%	6%	5%
B1 個に応じた学習(例:教室でのドリル演習)	10%	14%	19%	23%	31%
B2 調査活動(例:インターネット等で調べ学習)	2%	3%	9%	27%	54%
B3 思考を深める学習(試行錯誤する課題など)	2%	6%	17%	32%	41%
B4 (個人での)表現・制作(例:レポートやプレゼン作成)	1%	2%	9%	30%	54%
B5 家庭学習(例:家庭でのドリル演習、反転学習)	6%	11%	17%	27%	36%
C1 発表や話し合い	3%	5%	16%	28%	46%
C2 協働での意見整理	2%	5%	13%	25%	52%
C3 (グループ等での)協働制作	1%	3%	9%	20%	64%
C4 学校の壁を越えた学習	1%	1%	3%	5%	87%



D 「データの活用」(回答割合%)

分類	①	②	③	④	⑤
A1 教師による教材の提示	57%	22%	11%	4%	4%
B1 個に応じた学習(例:教室でのドリル演習)	10%	15%	18%	23%	32%
B2 調査活動(例:インターネット等で調べ学習)	2%	8%	16%	28%	42%
B3 思考を深める学習(試行錯誤する課題など)	2%	9%	17%	31%	38%
B4 (個人での)表現・制作(例:レポートやプレゼン作成)	2%	5%	10%	35%	45%
B5 家庭学習(例:家庭でのドリル演習、反転学習)	6%	12%	16%	25%	38%
C1 発表や話し合い	3%	7%	16%	31%	40%
C2 協働での意見整理	2%	7%	15%	27%	47%
C3 (グループ等での)協働制作	1%	4%	12%	23%	57%
C4 学校の壁を越えた学習	0%	1%	3%	4%	87%



【分析・考察】

一斉学習(A1)では、約半数の学校が全ての領域において「①毎時間」と回答している。また、個別学習(B1~B5)と「C1 発表や話し合い」「C2 協働での意見整理」「C3 協働制作」について、全ての領域において昨年度と比較して「⑤ほとんど行っていない」の反応が平均9ポイント低下している。個別学習や協働学習の場面でのICTの活用が進んできている実態が読み取れる。

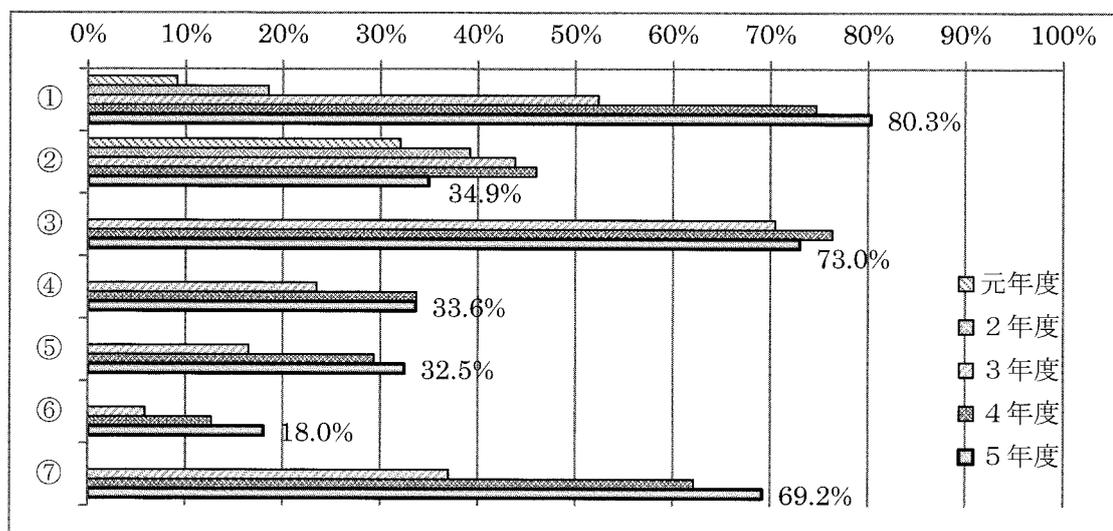
領域間で比較すると、「B2 調査活動」「B4 表現制作」「C1 発表や話し合い」「C2 協働での意見整理」「C3 協働制作」において、データの活用領域が他の3領域と比べて「⑤ほとんど行っていない」が5ポイントから10ポイント程度低く、この傾向は昨年度と同様である。データの活用領域では、調査活動、データ処理や分析、プレゼンテーションアプリ等を活用した考察の発表等、ICTの活用が効果的と考えられる学習場面が他の領域より多いと推察される。

自由記述欄では、領域を問わず、デジタル教科書の提示に次いでロイロノートの活用が多く挙げられた。「ロイロノートを使って、生徒一人一人の考えを共有できる」「ロイロノートの『共有ノート』で板書を生徒と共有し、オンライン授業にも利用している」等の活用方法が紹介されている。また、「eライブラリ」「ドリルパーク」「キュービナ」等のドリルアプリを授業中や家庭学習で取り組ませている事例が報告されている。図形領域や関数領域では「ジオジェブラ」を使って図形やグラフを自由に変化させて特徴をつかむ活用が報告された。データの活用領域では「Excel」等の表計算アプリによるデータ処理やグラフ作成、「PowerPoint」等でのスライド発表、「ジャムボード」「スクールタクト」等を活用したグループの意見共有が目立った。また、ヒストグラムや箱ひげ図を簡単に作成できる「スグラパ」が便利との報告もあった。

設問5 令和4年度及び令和5年度1学期での「四分位範囲」「箱ひげ図」の指導に関して、①～⑦において、当てはまるものを全て選んでください。

- ①用語の意味や指導のねらいを理解して、指導ができた。
- ②用語の意味や指導のねらいを理解して指導したが、実際の指導では不安があった。
- ③「箱ひげ図」の指導において、主として、教科書（移行用補助教材）の導入課題や例題を導入問題として、指導をした。
- ④「箱ひげ図」の指導において、主として、教科書（移行用補助教材）の例題以外の教材の問題や自作の問題を導入問題にして、指導をした。
- ⑤生徒に実際に身近な問題を解決するために必要なデータを収集させて、それを基に生徒に「箱ひげ図」を作らせた。
- ⑥生徒が「箱ひげ図」を作る学習過程において、生徒に表計算等のアプリを活用させた。
- ⑦「箱ひげ図」を用いて、複数のデータの分布の傾向を比較して読み取らせたり、批判的に考察させたりした。

設問5	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
回答校（数）	485	211	441	203	196	109	418
回答割合（％）	80.3%	34.9%	73.0%	33.6%	32.5%	18.0%	69.2%



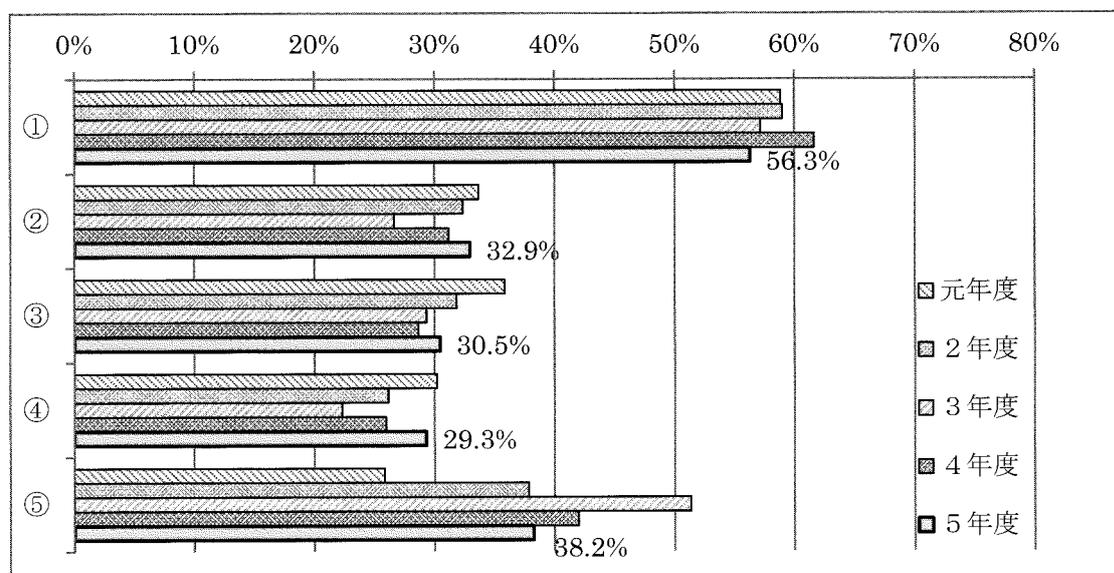
【分析・考察】

①②の項目は、令和元年からの経年グラフで示している。今年度は、「四分位範囲」「箱ひげ図」の指導で、「①指導内容を理解して、指導できた」が80.3%と増加し、現行の学習指導要領の完全実施3年目で、8割以上の教員が指導の手応えを感じ、②の項目から指導する際の不安も減ってきていると推察できる。⑤⑥⑦の項目は昨年度よりも増加しており、教科書のと推測される。特に「⑥箱ひげ図を作る学習過程において、生徒に表計算等のアプリを活用させた。」や「⑦箱ひげ図を用いて、複数のデータの分布の傾向を比較して読み取らせたり、批判的に考察させたりした」が年々増加している。ICTの活用や対話的な活動により、理解度を高める指導法の推進が図られている。

設問6 学習指導要領において、数学科の目標の改善として、「数学的活動の一層の充実」が挙げられています。自校で「数学的活動の一層の充実」に取り組む上で今後研究したい内容を次の中から2つまで選んでください。

- ①主として日常生活や社会の事象に関わる学習過程を重視した数学的活動
- ②主として数学の事象に関わる過程を重視した数学的活動
- ③討議、発表などの言語活動を重視した数学的活動
- ④実験、操作、調査などの体験活動を重視した数学的活動
- ⑤数学的活動の評価方法
- ⑥その他（具体的に記述してください。）

設問6	①	②	③	④	⑤
回答校（数）	340	199	184	177	231
回答割合（％）	56.3%	32.9%	30.5%	29.3%	38.2%



【分析・考察】

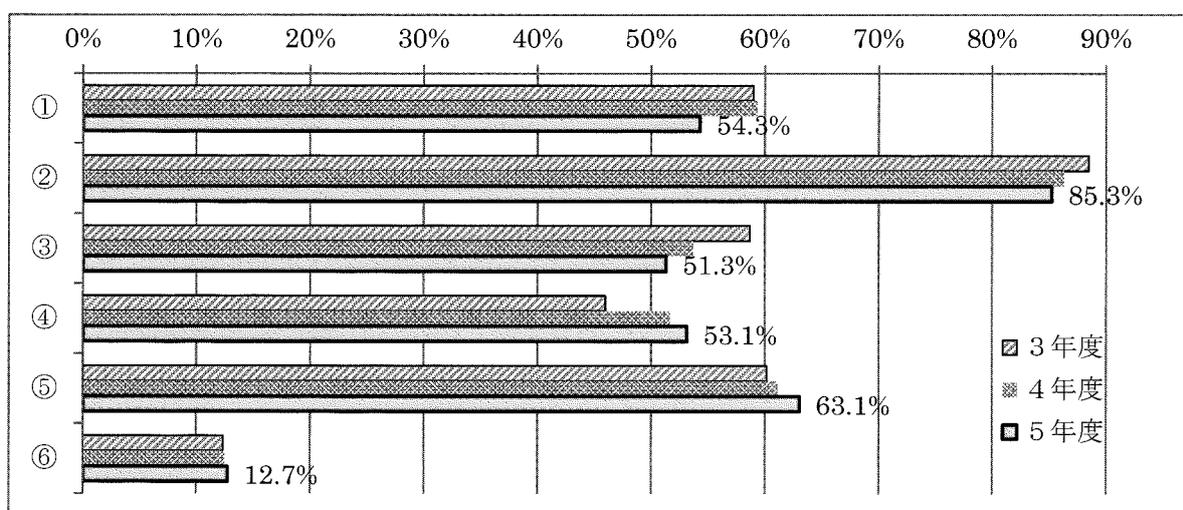
「①主として日常生活や社会の事象に関わる学習過程を重視した数学的活動」の回答は減少しているが56.3%で研究したい活動として1番高い数値が示された。「②主として数学の事象に関わる過程を重視した数学的活動」「③討議、発表などの言語活動を重視した数学的活動」「④実験、操作、調査などの体験活動を重視した数学的活動」は令和3年度を境に2年連続で増加している。コロナ禍が終わり様々な数学的活動が可能になり、数値が上昇していると推察できる。

それと比較して、「⑤数学的活動の評価方法」を選択した学校は、38.2%と2年連続減少した。現行の学習指導要領の完全実施3年目となり、数学的活動の評価方法でも研究が継続され、昨年度より教員が不安を抱かずに指導できていると推察される。

設問7 「主体的に取り組む態度（学びに向かう力）」をどのように評価していますか。次の中から5つまで選んでください。

- ①行動観察（机間指導等を通じて捉えた生徒の取組の様子、発言の内容など）による評価
- ②ノートやワークシートの記述内容に基づいた評価
- ③自己評価シートや相互評価、個別面談の内容による評価
- ④ペーパーテスト（定期考査、単元別テストなど）による評価
- ⑤パフォーマンス課題（レポートや発表など）による評価
- ⑥ポートフォリオによる評価
- ⑦その他…具体的に記述してください

設問7	①	②	③	④	⑤	⑥
回答校（数）	328	515	310	321	381	77
回答割合（%）	54.3%	85.3%	51.3%	53.1%	63.1%	12.7%



【分析・考察】

設問7は、現行の学習指導要領における「主体的に取り組む態度（学びに向かう力）」の評価方法について、令和3年度から新たに加えた設問である。「②ノートやワークシートの記述内容にもとづいた評価」が85.3%と令和3年度から3年連続で最も高く、主に授業における生徒の書く活動等を通して、評価をしている教員が多いことが分かる。次に高い数値は「⑤パフォーマンス課題（レポートや発表など）による評価」の63.1%で、レポートや具体的な課題をアウトプットさせることで、「主体的に取り組む態度（学びに向かう力）」を評価しやすくなると考える教員が多いと推察できる。その一方で「①行動観察（机間指導等を通じて捉えた生徒の取組の様子、発言の内容など）による評価」が54.3%、「③自己評価シートや相互評価、個別面談の内容による評価」が51.3%と、普段からの授業の生徒の取組状況等で評価をしている教員は5割は越えているが少しずつ減少している。

また「④ペーパーテスト（定期考査、単元別テストなど）による評価」は53.1%であり、昨年度より1.4ポイント上昇し、年々増えている。問題作成の工夫や評価基準を研究した成果によりペーパーテストによる評価が増えたと推察できる。

設問 8 学習指導要領において評価が3観点になりました。昨年度、今年度と数学の学習を評価するとき課題となっていることは何ですか。記述欄に具体的に記述してください。

◇評価における課題の主な記述内容 (518校の記述より [特になし、未記入を除く])

【主体的に学習に取り組む態度の評価に関すること】

〈主体的に学習に取り組む態度の評価全般について〉(124校)

- ・主体的に学習に取り組む態度の評価についてどう評価し、どう見取ればよいか。
- ・主体的に取り組むということの捉え方。

〈主体的に学習に取り組む態度の評価の数値化〉(14校)

- ・主体的に学習に取り組む態度の数値化が大変難しい。
- ・根拠がはっきりした数値化の仕方。

〈主体的に学習に取り組む態度の評価材料について〉(42校)

- ・主体的に学習に取り組む態度の評価材料は何が適正なのか。
- ・主体的に学習に取り組む態度の評価材料の設定・収集。

〈主体的に学習に取り組む態度の評価規準について〉(14校)

- ・主体的に学習に取り組む態度の評価規準を定めることが課題である。

〈調整力と粘り強さについて〉(8校)

- ・ねばり強さと調整する力の測り方と評価の仕方。特に、自己調整力の評価。

〈担当教員によって評価方法が大きく変わること(少人数等で)〉(25校)

【思考・判断・表現の評価に関すること】

〈思考・判断・表現の評価について〉(21校)

- ・思考・判断・表現の評価がどうしても低くなってしまうこと。
- ・思考・判断・表現の評価材料が少ない。(テスト以外)

【3つの観点の関係性に関すること】

〈第1、第2観点と第3観点との関係性について〉(74校)

- ・3観点が相関関係にある成績を付けることが難しい。

〈特異な評価について(CCAなど)〉(54校)

- ・CCAという評価がどうしてもついてしまう。

〈4観点から3観点になったことに関すること〉(22校)

- ・各観点の重みが大きくなり、思考判断表現の割合が増え、評定が下がる傾向にある。

【評価方法に関すること】

〈テストに関すること〉(25校)

- ・観点別の配点の割合と難易度。
- ・定期考査の得点と評定値の整合性。

〈評価材料の評価の仕方について〉(8校)

- ・提出物の評価の仕方。記述の課題の評価の仕方。自己評価に対する評価の仕方。

〈時間に関すること〉(9校)

- ・主体的に学習に取り組む態度の評価のための時間の捻出。

3 まとめ

学習指導要領の改訂により、どのような資質・能力の育成を目指すのかが明確化され、各教科の「見方・考え方」も改めて明らかになった。完全実施3年目となり、改訂の理念を理解し、各校で適切に対応した授業実践が行われていることが調査結果から分かる。一方で、実践する中で課題が解消していないものもある。以下に調査結果を設問に沿った3つの視点でまとめた。

【指導に関して】 研修したい内容で「学習指導要領に沿った授業づくり」がゼロに近づいていることから、指導の研究や実践により、新たな指導内容に対応できていることが分かる。新たに追加された「四分位範囲」「箱ひげ図」の指導では、ほとんどの学校で自信をもって指導できている。その中でも、課題であった社会生活と関連させた場面での課題解決や意思決定の能力育成の機会となる「データの比較や批判的に考察させる指導」が一昨年の倍近い7割で適切に指導ができており、統計的な内容での改善・充実がみられる。

【評価に関して】 評価の課題として「主体的に学習に取り組む態度」に関する回答が3分の1以上あり、悩んでいる学校が多いことが分かる。課題を細分化すると、評価に関する理解の難しさ、評価の数値化、適切な評価材料、評価基準の設定、調整力と粘り強さの評価方法、複数教員による評価の客観性等、課題は様々である。また、「思考・判断・表現」に関する回答も一定数あり、評価材料やテストの難易度に対して苦慮している。それぞれの観点で、提出物の評価、記述式課題の評価など評価材料の評価の仕方についても、基準や客観性、効率性などの課題がある。

また、3つの観点の関係性に関する回答も多く、自治体や学校で特異な評価（CCAなど）に関する扱いの違いから混乱したり、悩んだりしている状況がある。

どの課題も最終的には、各教員による評価に関する深い知識と理解が必要である。4観点との比較ではなく、3観点を新たな評価と捉え前例にとらわれず理念や留意点に注意して、各校で共通理解を図っていくことが最も大切であると考えられる。

【ICTの活用に関して】 令和3年度に一人一台配布されたタブレット端末の活用については、昨年度より設問を細分化してICTの活用状況を調査している。結果として、少しずつではあるが、ほとんどの項目で活用状況が頻繁になっている。授業での教師のICTの活用は、当たり前になってきているが、生徒の授業での活用頻度はそれほど増加していない。調査では、ICTの有効な活用を目指して、設問4の分析・考察でソフトやアプリについてふれている。各自治体のICT環境にも違いはあるが参考にさせていただき、各校での実践に役立てて欲しい。

この調査結果や集計結果が単なる資料としてだけでなく、各校の数学の授業の改善に生かされることを願っている。そのためには、調査結果を各委員会や各地区でも検証する材料として活用し、さらなる授業力の向上に活かしていただけるとありがたい。

結びに、今回の調査の実施にあたり、ご回答いただいた各校の先生方、調査用紙の配付・回収及び集計等を快くお引き受けいただき、「数学推進にかかわる実態調査」の作成にご協力をくださった各校と各地区連絡理事の皆様に対し、心から深く感謝を申し上げます。

(文責 調査部 部長 南 英昭)